

ろな分野を研究する貴重な基礎資料になっています。したがって、これは中国の歴史学、社会学、地方史学において注意すべき、また研究すべき材料です。特に調査の方法、それから資料を整理する方法においては参考にすることが多くあります。

第4に、1900年から1945年までの間は、まさに日本の軍国主義が戦争に向かう時期でもありました。したがって、東亜同文書院は自覚的、あるいは非自覚的に日本の対中侵略とどうしても結びついてしまったわけです。侵略戦争の間、東亜同文書院の学生たちは従軍通訳、情報収集を行って、日本軍のために情報を提供しています。そういう意味で、中国侵略にも直接かかわっています。同時に指摘しなければいけないのは、戦争を始めた日本政府と同文書院の先生、生徒の間には区別があるということです。根本的に申しますと、同文書院も戦争の被害者であるということです。たとえば第二次上海事変のとき、同文書院の10万冊の図書も戦火に遭って焼けており、これ自体が大きな損害です。

今日から20世紀を振り返りますと、20世紀は戦争の世紀でした。歴史の教訓が明らかにしていますとおり、戦争の時代において教育は時代の

埒外にあることはできません。そしてまた、やむをえずそれに巻き込まれてしまいます。中日両国は文化の源は同じです。平和を保ってこそ、両国に友好と幸福をもたらされるということが出来ます。今日はアジアの協力の時代で、これが潮流になっています。同時に各国も現実的路線が必要であり、アジアを発展させるために必要な道です。私たちは手を携え、ともに新しい世紀におけるアジアの協力を進めたいと思います。歴史を振り返り教訓を汲み取る者は、新しい世紀のアジアの振興の道を進むためです。以上、私の報告です。ありがとうございます。(拍手)

藤田 どうもありがとうございました。書院の持っている中国でのポジション、性格といいますか、それが時代的、あるいはいくつかの分野からいろいろな側面を持っているというお話をおまとめいただきました。何かご質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

これまでの発表を時間刻みで急いでやっているものですから、なかなか追いついていけないところがあるかもしれません。少しお考えいただいて、夕方にまたご議論いただければと思います。では先生、どうもありがとうございました。(拍手)

## 4. 「東亜同文書院関係者の中国革命支援 —孫中山と山田兄弟の関係を中心に—」

馬 場 毅

藤田 4番目は、本学の馬場先生のご発表です。タイトルは、「東亜同文書院関係者の中国革命支援—孫中山と山田兄弟の関係を中心に—」ということでお話いただきます。では、よろしくお願いいたします。

馬場 ただいまご紹介にあずかりました馬場でございます。早速始めさせていただきます。東亜同文書院は1901年に設立されました。そのとき

の設立趣意書によれば、日清戦争後の列強からの分割の危機に際して中国保全と日中の共存共栄を掲げ、そのための政治経済面の実務家養成を目的としました。この点についてはいま蘇先生もおっしゃいましたように、私もアジア主義だと考えています。

しかしながら、設立のときすでに日本は台湾を植民地化し、中国分割に参加し、中国保全に敵対

する行動を取っています。当時の東亜同文書院の関係者が、日本政府のそのような行動に対して批判的な言動を行った事例は見られません。最初から自国政府の政策と大学設立の目的との矛盾は十分突き詰められていなかった。私は、これはずっと続いたと考えています。特に、日本の国家として、1905年の日露戦争後帝国主義化していきます。そうすると、東亜同文書院の掲げた中国保全と日中の共存共栄という目標と、矛盾対立は拡大していきます。とりわけ、1937年以後の満州事変以後は大変顕著であったと思います。

しかし、中には身命を賭して中国革命を支援した者がいました。特に31年の満州事変以後になると、多くの東亜同文出身者が国策に従うかたちになりますが、そういう中でも、あるいはそれ以前から身命を賭して中国革命を支援した者がいます。非常に多様な人材を輩出したところも、私は東亜同文書院の特色であると考えています。

これから述べます山田良政および純三郎兄弟が主として活躍したのは1920年代までですが、身命を賭して孫中山の革命運動に協力した人物であると考えています。これが山田良政の写真で、東亜同文書院記念センターのほうにいらっしゃると必ず掛かっている有名な写真です。

山田良政の、東亜同文書院との関係だけを簡単に抜き出してみました。先ほどの藤田先生のお話にありました日清貿易研究所には、1890年に昆布会社に勤めながら通っています。1899年7月には、東亜同文会に参加しています。1900年5月には南京の東亜同文書院が開校されますが、そのときに教授兼舎監になっています。ところが8月に、孫中山率いる革命への参加のため、南京東亜同文書院を辞しています。これが簡単に東亜同文書院との関係になります。

彼が革命に関係したことについて、簡単に申し上げたいと思います。清朝の革命あるいは変革に関連したことになりますが、1898年6月から戊戌変法が始まり、その段階から彼は変法派と付き

合いを始めていきます。そのときに、滝川具和や平山周などもここに参加しています。ところが、戊戌変法自体が98年9月に西太后による保守派のクーデターによって弾圧されます。そのときに山田良政は変法派の王照という人物を、日本大使館付きの海軍武官でありました滝川具和と平山周とともに逃がします。平山周というのは、1897年に孫中山のところに行き、支那革命党、当時の興中会および孫中山が反清の武装蜂起のために動員した天地会や哥老会という秘密結社について書いた人で、この本は後に中国語に訳されました。秘密結社という言葉をもっと使ったのは平山周で、それが中国語に入ったと聞いています。

クーデターのときに次々と改革派の人間が捕まるわけですが、清朝の役人が捕まえようとするのを北京から天津に逃がし、当時停泊中の日本の軍艦大島に収容しています。当時梁啓超が日本の公使館に保護されており、一緒に日本に亡命していきます。この事件が、いわゆる大陸浪人の中で山田良政が大変注目されていく事件になったと思います。

孫中山との出会いは、99年7月に平山周の斡旋によって日本の東京神田三崎町の家で孫中山と会って意気投合し、それ以前の変法派支援から革命派支援に転換していきます。1900年6月、上海の旅館で孫中山と会って革命蜂起の構想を打ち明けられ、参加を表明しています。このときに、山田純三郎を正式に孫中山に紹介しています。

一方東亜同文会自体は、山田良政や南京同文書院の学生の革命運動への参加を禁止していました。しかし、山田良政はこれに従いませんでした。ですから、後の惠州起義のときに、彼はすでに南京同文書院を辞めて参加しています。この惠州起義ですが、当時の政治情勢として、北方では清朝が8カ国連合軍に宣戦布告しています。したがって、清朝及び義和団と8カ国連合軍との戦争状態になっていて、清朝としては国内のことに十分に対処できませんでした。そういう隙について南の

広東省で蜂起をするという経過です。

しかも、これに日本の台湾総督府が関与しています。山田良政が仲介して、当時の台湾総督の児玉源太郎と台湾総督府の民政長官であった後藤新平が、孫中山に対して、もし起義軍が広東省の陸豊、海豊まで来たならば、児玉総督が台湾から3個師団の武器供与と日本軍人の起義軍への参加を約束します。このとき、孫中山自ら台湾に行っています。ある意味ではそれをあてにして孫中山の支持を受け、鄭士良が三合会あるいは天地会とも言っている秘密結社を率いて惠州で蜂起をします。そのときに当然この約束が果たされることを期待していますし、指導者として孫中山が参加することを期待しています。起義軍は沿岸部を福建省の厦門まで目指して行きます。

ところが、このときに日本の内閣が変わりました。山県内閣が総辞職したあとで、伊藤博文が、このように福建省に日本の権益を拡大することは列強の反発を食うということで、児玉総督の企てを禁止します。すなわち、孫中山への武器供与と日本軍人の参加を禁止するのです。そのため山田良政は、孫中山の命によって児玉総督の方針変更と臨機応変の措置を伝えるため派遣され、鄭士良の元に到着します。鄭士良は日本の援助が得られないことがわかった段階で軍を解散し自分の本拠地に戻ろうとするわけですが、惠州の東郊の三田祝というところで清軍に攻撃され、山田良政ら6人が捕虜になっています。山田良政は日本人だと名乗れば助かった可能性があったと言われていますが、一言もしゃべらずに殺されます。この遺体は密かに葬られ、日本人で中国革命に殉じた最初の一人となります。1918年にどこに葬られたかわかるのですが、1900年には行方不明になってたぶん死んだということになります。

今、皆さんがご覧になっているのは山田良政先生墓碑です。民国二年とありますが、1913年2月、孫中山が日本に来たときだと思います。それによれば山田良政先生は弘前の人である。庚子又八月、

革命軍惠州に起こるという。庚子は西暦でいうと1900年ですが、この年は閏年で8月が2回あり、あとのほうの8月は西暦でいうと9月から10月です。ちょうど惠州起義が始まり、そして山田良政が死んだ時期にあたります。

一方、山田純三郎ですが、純三郎は1900年5月に南京同文書院に入学しています。1901年、良政の影響もあって中国革命に興味を持って学業に身が入らず、東亜同文書院を退学になっています。しかし当時は非常におおらかだったようで、当時の院長根津一が、退学となった学生を事務員兼助教授にしています。いまでは考えられないことです。その後1904年に、日露戦争従軍のため東亜同文書院を辞職します。その後1907年には東亜同文書院教授となって、5月に満鉄に入社したためにこれを辞めています。総裁は、初代総裁後藤新平。惠州起義にも関与した後藤新平です。

孫中山を盗み見たというのは1899年7月山田良政が孫中山に会った時に障子の陰から見たという話で、正式に紹介されたのは1900年6月です。写真の左が山田純三郎で、右のほうが孫中山です。両者とも洋装ですが、なかなか立派な服装をしています。

山田純三郎と中国革命とのかかわりですが、1911年11月、辛亥革命のあとになると思います。革命派の陳其美が上海の機器局を襲撃したとき、日本の有吉総領事が支えていたと言われますが、山田純三郎は事前に有吉総領事から拳銃3丁を借りて陳其美に渡しています。日本の外交官が拳銃を渡すという、清朝からいうととんでもないことを行なったことになります。その後1911年12月に、孫中山が米国から欧州経由で帰国したときに、これも有名な大陸浪人である宮崎滔天とともに香港まで迎えに行き、その後上海まで同行しています。

当時山田純三郎は上海に派遣されて、満鉄の撫順炭を三井に売っていました。その関係で三井との関係があり、そのことを孫中山が聞いて三井と

の借款交渉を仲介してほしいと要請します。当時、革命軍および中華民国政府で孫文は臨時大總統になりますが、大変な財政困難になっている状況で、三井への借款要請をし、山田純三郎が仲介します。

そして、漢冶萍公司を日中合弁とする条件での500万円の借款が、1912年2月2日に当時の臨時大總統の孫中山と黃興が借款条約に署名して印を押して成立し、山田純三郎と三井物産の上海支店長の藤瀬政二郎が300万円の小切手を孫中山に渡します。しかしながら、その借款条約の中に、中国における鉱山、鉄道、電気などの事業を外国に許可するにあたり、三井物産に優先権を与える条項があったため、中国国内で反対運動が起こり、漢冶萍公司の株主総会でこの契約が否決され、この借款は途中で立ち消えになります。山田純三郎の回想録によると、この300万円の金は後に袁世凱と孫中山との妥協が成立したあと、革命軍から横浜正金銀行を通じて返還されたといっています。

もう一つ、同じように満州租借を条件とする1000万円の借款があります。これもほぼ同じ時期ですが、1912年2月3日に南京で臨時大總統の孫中山と三井物産の大物である森恪が話し合いをし、その席に胡漢民、それから宮崎滔天、山田純三郎も立ち会います。森恪は、当時の元老でありました桂太郎の内意を受けた益田孝の内命を受けていました。日本をロシアの満州への進出をこの時期も大変警戒していて、満州を一任するという意味での満州租借論を認めるならば、日本側から援助を与えようという提案をします。

孫中山は袁世凱との和議成立を控え、臨時大總統を辞職しなければいけません。結局、森恪のこの提案を受諾します。2月8日までに1000万円の借款を日本から供与することを約束することを条件に、満州租借を日本に認めることを応諾します。しかし、2月8日になっても日本側からの応諾の返事がなく、結局この話は実現しませんでした。中国国内でも2月12日に南北和議が成立し、14日に臨時参議院が孫中山の臨時大總統辞任を

認め、このような交渉が実現する状況ではなくなります。したがって、三井物産を通じてのこの二つの借款は実現しませんでした。ただ、山田純三郎がその仲介をやったということです。しかもこれは、孫中山の要請によって仲介をしています。

第二革命に孫中山が失敗したあと、中国の東北部、満州のほうで、反張作霖の動きを起こそうということになりました。満州への工作は陳其美がやっていましたが、1914年6月ころ、黒竜江方面の軍閥が張作霖討伐のために連絡を取りたいという話があり、孫中山の命により、山田純三郎、蔣介石、丁仁傑の3人が満州に出かけていきますが、結局呼応する軍閥はおらず成果を上げられませんでした。同じように1915年にも、山田純三郎は陳其美、戴天仇とともに大連に行き、犬塚信太郎の斡旋によって満鉄病院を本拠とした活動をしました。これも成果は上げられませんでした。このように第二革命が失敗して孫中山が日本に亡命したあと、東北への工作に派遣されました。

1915年2月の日中盟約について、これが真実か偽りかということについては、日本および台湾で論争中の問題です。台湾側はこれを一切認めておりません。日中盟約の中に、中国の陸海軍の使用する兵器、弾薬などは日本と同じものにする。それから、中国の軍隊に日本軍人を採用すること。政府へ日本人を採用すること。これらは21ヶ条で日本が要求して、袁世凱政権の反対にあって結局当時の日本政府でも取り下げた第5号の内容です。それを孫中山が、一時期ですが認めています。ですから、台湾側からいうと国の父たる孫中山が、袁世凱政権ですら拒否した内容を認めていることになるので、断固として認めておりません。これについては日本国内でも賛否両論あり、その詳細については私の原稿を見ていただきたいと思います。

いままで出ている以上の資料がないものですから真偽については判断できませんが、私としては結ばれた可能性が強いと思っています。山田純三

郎自身、こういうふうに言っています。「支那側が孫さんと陳其美、日本側は犬塚さんと私の間である密約が結ばれた。」これらの人物が署名した4人です。「いまでも某所の金庫の中に、〇〇の〇〇は深く蔵されているはずだ。そしてそれを実際に書いたのは秋山将軍である。」すなわち日露戦争のときの東郷平八郎の参謀長が書いたと言っています。

第三革命中には、山田純三郎自らが中華革命党の当時の機関誌『民国日報』の社長になっています。その中で公的には21ヶ条条約の日本の強要と袁世凱の帝政運動を批判します。なぜ山田が社長になったのか。これはおそらく、袁世凱政権の弾圧を招かないためだったと思います。

この時期、フランス租界にある山田純三郎の満鉄の社宅は、革命派の実質的な本部の役割をしており、そこにいた陳其美が袁世凱の派遣した暗殺者に殺されます。東亜同文書院大学記念センターに殺された直後の陳其美の写真があるかと思います。そのときにその場にいた女中が長女民子を三和土の上に落としてしまい、そのため民子は一生涯不具となったという犠牲を払っています。

1920年代に、山田純三郎は広東軍政府時代にも陳炯明クーデターのときに孫中山を援助したり、犬養毅が1923年11月に入閣したときに、孫中山からの書簡を託されています。ここでは孫中山は、1919年の五四運動以前のように日本に頼って革命をやるのではなく、中国の労働者や農民に依拠しながらやろうというふうに変わっています。そういう中で、日本の政策への転換を要請しているのがこの書簡かと思います。

孫中山が1925年に死にますが、そのときに山田の従兄弟の菊池良一と宮崎滔天の兄の民蔵、萱野長知とともに立ち会っています。同文書院大学記念センターでは、臨終に立ち会った唯一の日本人と記していますが、あれは少し違うと思っています。山田純三郎は宋慶齡に招かれて病室の中に入れられていますが、そのように孫中山の信頼が

厚かったと思います。

最後に彼の評価として、これは孫中山の言葉ですが、「それ革命のために奔走して、終始怠らない者は山田兄弟、宮崎兄弟、菊池、萱野とあり」と言っています。これは1918年の言葉ですが、孫中山が大変高く評価しています。ほかの人間については、利権を目指して孫中山に近づいてくると言い、孫中山は日本の大陸浪人の一部に対してだいたいやになっているわけです。信頼を得た理由として、兄良政は自ら一命を捧げている。弟は私利私欲を謀らなかったことが重要だと思います。

山田純三郎は、日本人の立場を利用して、中国人革命家のできない役割をしています。先ほどの『民国日報』の社長になったり、孫中山が1924年に張作霖と会うときに、張作霖に付いていた町野武馬と事前に話をして、孫中山を張作霖が拉致しないようにという保証を得ていますが、それが日本人同士の関係を利用したものだと思います。そういう日本人としての立場を利用して独自の役割を果たしたところに、山田純三郎の役割があるのではないかと考えます。以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

藤田 どうもありがとうございました。今日のお話の内容は、東亜同文書院大学記念センター展示室にも展示してあります。山田兄弟は書院の卒業生ですが、中国革命とのかかわりをお話しいただきました。時間が来てしまいましたが、どうかお一人、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。では、この件も夕方をお願いします。どうもありがとうございました。

今日は時間を知らせるベルを用意したせいか、非常に規則的に時間が進んでいまして、予定どおり進行しています。これで午前の部を終わります。ご協力、どうもありがとうございました。(拍手)

司会 ご静聴、ご協力ありがとうございました。現在12時です。午後の部の開始が13時30分からです。またこの場にお集まりいただければと思います。